

特別陳列「畠田和一貝類コレクション展 7 畠田和一が採集していた絶滅危惧種 3」

2022 年 10 月 8 日（土）～2023 年 3 月 26 日（日）

岡山県版レッドデータブック 2020 で絶滅危惧I種とされた、内湾潮下帯（水深 5～30 m）の種（2）

展示する種（11 種）：ナワメグルマ、イソチドリ、マキモノガイ、ヤマホトトギス、クマサルボオ、ヤミノニシキ、ネリガイ、ホクロガイ、スダレガイ、オオスダレ、カノコアサリ。

これらの種の岡山県での減少要因は、海底の過剰な浚渫と考えられる。例えば現在の水島工業地帯は、その沖合の海底からサンドポンプで巻き上げた砂を用い、海岸線を埋め立てることで造成された。また同時に、高度経済成長期には海砂の需要が安価なコンクリート材料として飛躍的に高まり、岡山県を含む瀬戸内海中央部の海域各地で、盛んに砂の浚渫と採取がなされた。

これを行うと海底の地形自体が大幅に変形し、そこに棲息する生物すべてを根こそぎ死滅させるばかりか、砂を削り取った跡地には巨大な掘り鉢状の陥没がいくつも生じる。その底が深い場合は陽光が届かず、腐敗して無酸素状態となり、嫌気性細菌によって硫化水素など毒性の強い物質が発生する。これが荒天の時などに攪拌され、底から巻き上げられて表層に出てくる。この結果、穴の奥底のみならず外においても多くの生物を死滅させ、あるいは生態系の平衡を崩壊させて赤潮などが頻発する。

この繰り返しが大きな打撃となり、1960～80 年代という比較的短期間のうちに、個体群数・個体数ともに著しく減少した。これは特に県の西側（岡山市以西）で顕著であった。

また今回提示する種の一部は、県内で過去 50 年間生貝が見出されておらず、既に絶滅した可能性も否定できないものの、比較的新鮮な死殻が得られているか、棲息していても不思議はない環境がわずかに残されているという理由で、絶滅と断定せず、絶滅危惧 I 類または情報不足に含めたものである。（岡山大学 福田宏）

ナワメグルマ

*Heliacus enoshimensis* (Melvill, 1891)

(腹足綱：正腹足亜綱：異鰓下綱：クルマガイ目：クルマガイ上科：クルマガイ科)

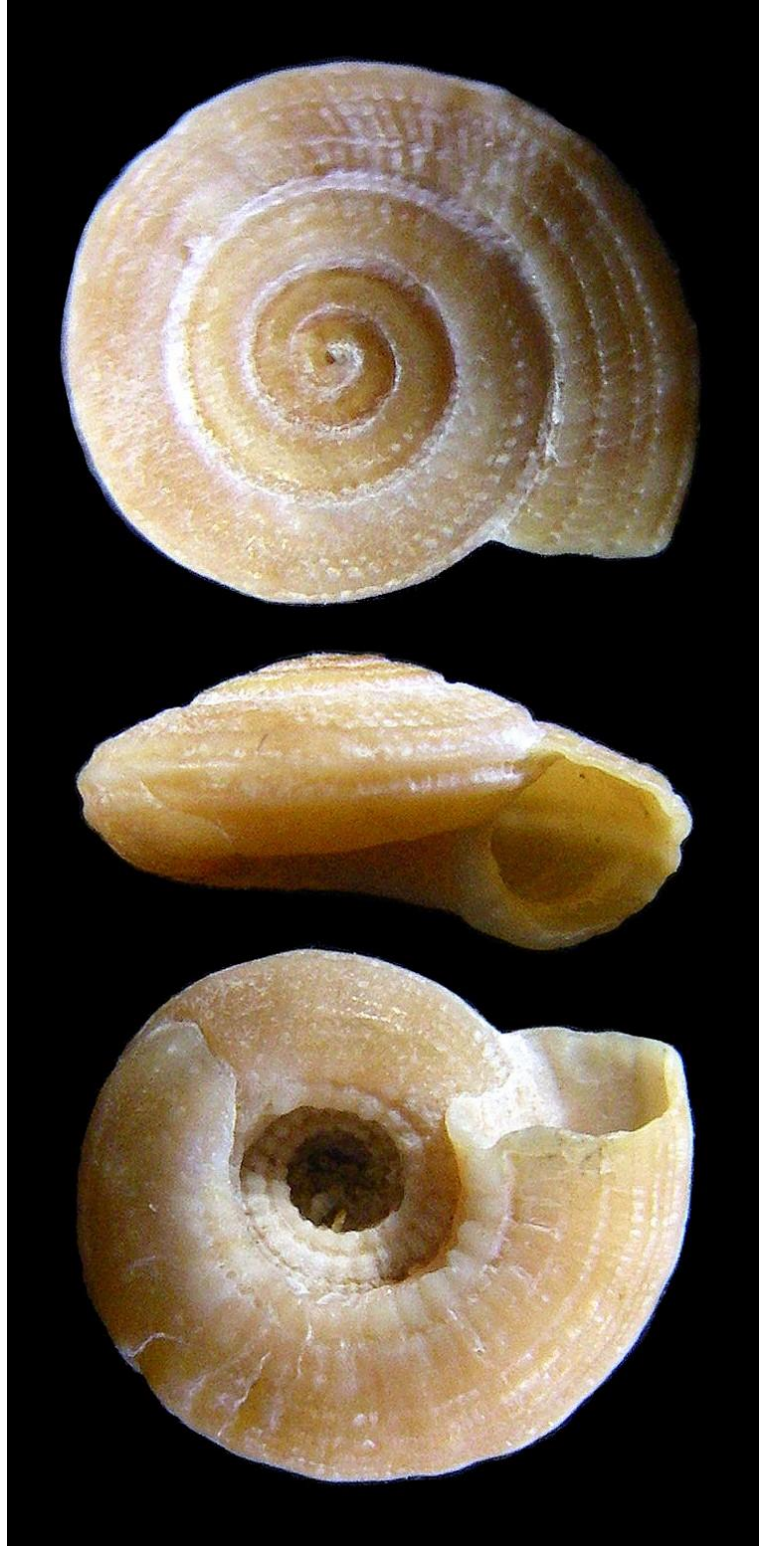
展示標本： #2020 [瀬戸内市] 牛窓町前島

太平洋側は房総半島，日本海側は男鹿半島以南，九州までと朝鮮半島に分布するが，南西諸島から記録された例はない。その一方で，南半球のオーストラリアの東海岸及びノーフォーク諸島，ニュージーランドのケルマディック諸島からの産出が知られており，それらの産地と日本・韓国周辺との間からは不思議なことに一切の記録がない。

潮下帯から浚渫された砂礫の中に死殻が見られるため，同様の環境に棲息し，クルマガイ科の他種と同様に刺胞動物を摂食すると想像される。しかし生貝は滅多に採集されないので，棲息の実態はいまだ明らかにされていない。広島県や香川県でも確認されているのはもっぱら死殻である。

岡山県では岡山市中区新岡山港に海底から揚げられた浚渫砂中から見出された死殻の記録があり，畠田和一コレクションにも「[瀬戸内市] 牛窓町前島」産 3 個体 (#2020；展示標本) が含まれている。牛窓町では 2004 年にも鹿忍の砂浜に打ち上げられた死殻 1 個が採集されているものの，これも摩滅した古い殻であり，現在の岡山県内に本種の個体群が現存していると判断できるだけの根拠たりえない。

近隣他県でも生貝が確認できていない上に，岡山県では海底の過剰浚渫と水質汚濁が重なって潮下帯の環境が著しく悪化した時期を経ているため，もともと少数個体から形成されていた個体群がその時代に至って完全に絶滅した可能性が否定できない。これはやはり潮下帯の砂中から死殻は時折得られるものの，生貝が確認できないヌノメツボ，スクナビコナトクサ，ネコノアシガキなどと同様である。



イソチドリ

*Amathina tricarinata* (Linnaeus, 1767)

(腹足綱：正腹足亜綱：異鰓下綱：汎有肺下亜区：発端有肺上目：トウガタガイ目：トウガタガイ上科：イソチドリ科)

展示標本： #278 [倉敷市] 下津井

太平洋側は房総半島以南から知られ、日本海側の確実な最北の記録は山形県鼠ヶ関である。南西諸島でも報告され、国外は中国（舟山群島以南）、香港、台湾、ベトナム、タイ、シンガポール、フィリピン、インドネシア、北東オーストラリア、インド、アラビア湾、紅海、マダガスカルから知られる。近年、本来分布していなかったイスラエルやキプロスでも産出が確認され、紅海からスエズ運河を通過して地中海へ侵入したと考えられている。

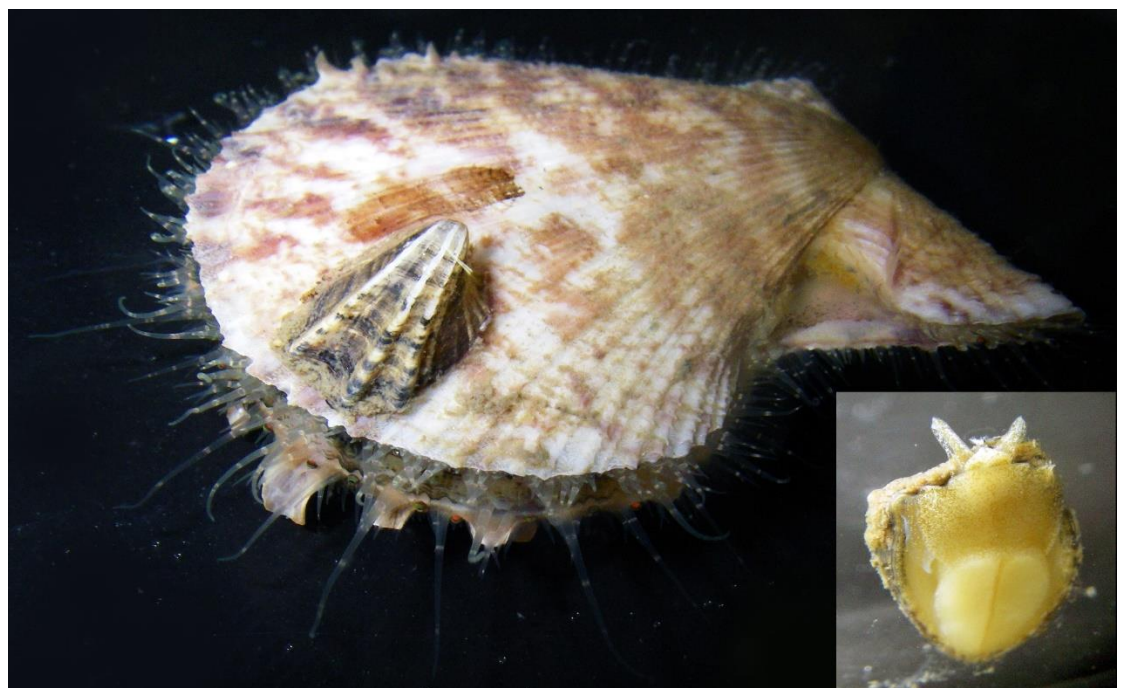
潮間帯下部から潮下帯にかけて棲息する二枚貝類の殻表に付着し、口吻を伸ばして体液を吸う。寄主はタイラギとイタボガキが広く知られ、カリガネエガイ、アズマニシキ、イタヤガイなども対象となる。

かつては普通種であったが、戦後の沿岸開発や水質悪化等によって主要な宿主のタイラギやイタボガキが激減したのに伴い、1990年代には健在産地がほぼ見失われるほど深刻な危機的状況に陥っていた。21世紀に入って英虞湾、広島県竹原市、有明海などで確認されるなど徐々に復活の兆しを見せ、香川県でも2013年に生貝が見出された。

岡山県ではかつて倉敷市塩生のサンドポンプで記録された。畠田和一コレクションには「[岡山市東区] 犬島、[笠岡市] 白石島」(7 個体, #279), 「[倉敷市] 下津井」(5 個体, #278; 展示標本), 「白石島」(「1954.8.20.」, 2 個体, #5823), 産地無記入 (1 個体, #312) の各標本が現存し、特に下津井産は殻皮と光沢がよく保存されている上、1 個体は乾燥した軟体も残っており、1950年代までは比較的容易に生貝が採集できたことが窺える。また産地無記入の標本はイタボガキに付着した状態で保存されている。

その後は他の海域同様に再発見されない時期が続いていたが、2016年11月、備前市日生町鹿久居島南岸の潮下帯（水深7-8 m, 軟泥底）に設置された人工漁礁から、アズマニシキに付着した生貝1個体が見出され、現在も県内に棲息していると判

明した。本種の産出は県内の水質などが近年改善され、種の多様性が回復しつつあることを反映すると考えられる。ただし現時点で1個体しか確認できておらず、依然として稀産のため危機的状況を脱したとは確言できない。



マキノノガイ

*Leucotina diana* (A. Adams, 1855)

(腹足綱：正腹足亜綱：異鰓下綱：汎有肺下亜区：発端有肺上目：トウガタガイ目：トウガタガイ上科：イソチドリ科)

展示標本： #2991 備中〔浅口市〕寄島

太平洋側は岩手県大槌湾以南，日本海側は新潟県下越地方以南，九州・韓国南部まで分布し，現時点で日本と韓国以外で明確な記録はない。南半球やインド洋での記録は本種ではないと考えられる。

内湾・外洋を問わず，潮間帯下部～漸深海底（水深約 50 m まで）の砂泥底において，ハボウキやタイラギ等二枚貝類の殻表に付着し，イソチドリ同様に口吻を伸ばして宿主の体液を吸う。

本来は干潟低潮帯にも産出する種であるが，イソチドリとともに戦後激減し，やはり 1990 年代にはほとんど棲息が確認されていなかった。近年になって和歌山市名草ノ浜，熊本県上天草市前島，静岡市清水区などで生貝が相次いで確認され，全体的に回復傾向にあるとみられる。香川県でも潮下帯でのタイラギ漁で生貝が確認されている。一方で潮間帯ではいまだ目にする機会が減多になく，浅所の個体群はほぼ消滅したまま戻ってきていない。

岡山県では文献記録はなく，畠田和一コレクションに含まれる「備中〔浅口市〕寄島」（「1956.1.23. 黒田〔徳米〕氏同定」，1 個体，#2991；展示標本）が現時点で唯一の産出の証拠である。この個体は殻口内の光沢が失われた死殻であり，他に標本がないことから 1950 年代当時も少なくとも浅所には多産せず，生貝は得にくかったものと推測される。その後は破片すら一切見出されておらず，現在の県内に本種が棲息している確証はない。ただし上記の通り香川県の潮下帯には今も確かに個体群が存在することから，岡山県でも深所にまだ生き延びている可能性は否定できない。もしそうだとすると狭い範囲に局限されていると考えられる。



ヤマホトトギス

*Arcuatula japonica* (Dunker, 1857)

(二枚貝綱：自鰓亜綱：翼形下綱：イガイ目：イガイ上科：イガイ科)

展示標本： #2552 恐らく倉敷市玉島黒崎沙美

近年の文献の多くは太平洋側の分布北限を「房総半島」としているが、北海道函館での産出記録が 19 世紀末から知られていた。日本海側は能登半島（石川県七尾市田鶴浜町唐島）以南、九州までと沖縄島の羽地内海・名護湾・金武湾・中城湾など、中国（黄海・南シナ海沿岸）、ベトナム、タイ、フィリピン・マクタン島などから産出が知られているが、朝鮮半島からは信頼できる文献記録が見当たらない。

内湾湾口部にあつて潮の流れが速く、海水が盛んに入れ替わる貧栄養の砂浜の潮間帯下部～潮下帯（水深約 10～70 m）の細砂底に産し、自ら分泌する粘液で周囲の砂を固めた繭の中で生きる。かつては砂浜に新鮮な合弁死殻が多数打ち上げられることもあったが、1990 年代には全国的な減少傾向が指摘され、近年は有明海など一部の産地を除き滅多に見られなくなっている。瀬戸内海でも最近 20 年間では広島県芸南地方や香川県などわずかな産出例が知られるのみである。

岡山県では畠田和一コレクションに「玉島市〔現・倉敷市玉島黒崎〕沙美」（「1960.6.5. 文比古，世津子，同伴」，合弁 1 個体，#5675）及び「備中〔浅口市〕寄島町中安倉」（「1955.8.30.」，合弁 1 個体，#1393）が含まれているのに加え、実に 703 個体もの美しい合弁個体が一つ一つ丹念に紐で結わえられた上で、同じ小箱にまとめられた圧巻のロットが存在する（#2552；展示標本）。この膨大な個体数の標本には残念ながら産地を表記したラベルがないが、各個体の大きさや色彩などの特徴は上記 #5675 の沙美産標本と共通していることから、恐らく沙美海水浴場の砂浜に打ち上げられていたものと推測できる。

畠田が活躍した 1950 年代以前には、そこまで大量の個体が岡山県内で産出していたことに驚きを禁じ得ない。というのは、その後は 2004 年に瀬戸内市牛窓町鹿忍の矢寄ヶ浜で小ぶりの半片 1 個が打ち上げられていたのが唯一にして最後の記録で、21 世紀に入ってから生貝はおろか合弁死殻すらも見出されていないからである。岡山県では高度経済成長期に本種の棲息に適した潮通しの良い場所の砂泥底環境がことごとく失われたため、本種ももはや絶滅寸前の状態に陥っていると考えられる。



クマサルボオ

*Anadara globosa* (Reeve, 1844)

(二枚貝綱：自鰓亜綱：翼形下綱：フネガイ目：フネガイ上科：フネガイ科)

展示標本： #1356「備前甲浦村」[現・岡山市南区飽浦・北浦・郡・宮浦]

国内の分布域は瀬戸内海，有明海，大村湾に限られる。国外では中国大陸沿岸，台湾，ベトナムから知られる。

大規模な内湾奥の潮間帯下部から潮下帯にかけて砂泥底に棲息し，同所的に産することの多いアカガイなどとともに漁獲対象とされていたが，近年は国内のどの産地でも極端な減少傾向にある。瀬戸内海周防灘沿岸では 1970 年代までは鮮魚店の店頭に並ぶこともあったが，以後は全く確認されていない。大村湾でも近年の記録はない。唯一継続的な棲息が知られている有明海沿岸においても，佐賀県ではかつて 200 トン前後あった水揚げが近年急激に減少し，1995 年からはほとんど水揚げされなくなったため，1998 年以降，漁業者の自主的な取り組みで全面禁漁とされたほどである。

岡山県では，1930 年代初頭に県内の貝類方言をまとめた桂 (1932) が「アカガイ (岡山市)」として挙げた図は紛れもないクマサルボオの特徴を示しており，当時はアカガイ共々地元の人々の生活の中で親しまれていたことが窺える。畠田和一コレクションにも「備前甲浦村」(現・岡山市南区飽浦・北浦・郡・宮浦)産の，採集時は生貝であったと推測される合弁 1 個体 (#1356；展示標本)が現存する。また稲葉 (1982) は「笠岡」を瀬戸内海における本種の産地のひとつとして挙げた。しかし今世紀に入ってから，殻皮が完全に失われて摩滅した古い半片死殻が岡山・倉敷・笠岡各市で少数採集されたのみで，生貝はおろか新しい死殻すらも全く確認できていなかった。かつて本種の主要な産地であったはずの児島湾及び笠岡湾の干潟が，干拓や水質汚濁によって原型をとどめないほどに破壊されたことで，もはや県内には本種の棲息可能な場所は存在しないと考えられたため，本県レッドデータブック前版 (2010) では「生貝の再確認は絶望的」とみなし，「絶滅」とした。

ところがその後，笠岡諸島北木島にある民宿の風呂場の壁に，殻皮の保存状態のよい本種の殻がアカガイとともに貼り付けられているのが発見され，その個体は 2004 年ごろ北木島近海で水揚げされて食用に供されたものと判明した。したがって北木島周辺には今なお本種が生き残っている可能性が高い。しかしそれ以外には生貝の確認はなしえていないため，依然として著しく稀産であることに変わりはなく，今後笠岡諸島周辺で棲息の実態を精査することが必要である。



ヤミノニシキ

*Volachlamys hirasei* (Bavay, 1904)

(二枚貝綱：自鰓亜綱：翼形下綱：イタヤガイ目：イタヤガイ上科：イタヤガイ科)

展示標本： #1490 [倉敷市] 下津井

国内の現生個体はかつて紀伊半島からも記録されたが、近年は瀬戸内海と有明海にほぼ限定される。国外は朝鮮半島，中国の黄海・渤海から知られる。

内湾の潮間帯下部～潮下帯（水深約 50 m）の砂泥底に棲む。かつて有明海では広い範囲で普通に見られ，1970 年代前半の有明海島原半島北岸では砂泥干潟下部に多産し，ヒメエガイなどととともに転石に足糸で付着していた。しかしその後甚しく減少し，現在潮間帯で生貝が見られる場所は国内にはない。

瀬戸内海では 1989–1990 年に香川県東部の備讃瀬戸で多数の生貝が底曳網で得られたものの，2014 年の香川県からの報告では「打ち上げで死殻がまれに採集されるが，生体は確認できていない」とされた。広島県芸南地方の倉橋町・仁方町・下蒲刈町・蒲刈町でも確認されているが，国内全体としては局所的にしか見られない。

岡山県では窪田 (1962) が「備前 [倉敷市] 下津井」の産地を挙げ，その標本は福井市自然史博物館に現存する。また畠田和一コレクションには「下津井」(#1490，展示標本；「黒田 [徳米] 氏同定」，#1494 及び 1508)，「[岡山市南区] 小串村」(#1497)，「備中 [笠岡市] 飛島」(#1491) の 5 ロット（1 個体ずつ，全て合弁）が含まれている。

しかしその後は極端に古い半片死殻がわずかに見られるばかりで，生貝産出の信頼情報はない。香川県と岡山県境附近の潮間下帯には今も生き残っている可能性があるため，今回は絶滅と断定するのは避けるが，個体群が健在とは到底言いがたいのが現状である。



ネリガイ

*Pandora otukai* Habe, 1952

(二枚貝綱：自鰓亜綱：異殻下綱：異歯区：真異歯亜区：異韌帶大目：ネリガイ目：ネリガイ上科：ネリガイ科)

展示標本： #2971 備中〔浅口市〕寄島，1956年1月23日

太平洋岸では点々と記録があるが，日本海では少なく，具体的な報告は長崎県の「千々石，有明，五島」などわずかしかない。南西諸島以南からは全く記録がなく，亜熱帯～熱帯域には分布しないと考えられる。国外は中国の渤海・黄海沿岸から知られる。

開放的な海岸において潮下帯（水深約 10～300 m）の細砂底に棲息し，死殻は時折砂浜にも打ち上げられる。相模湾では 30～175 m の間の 5 箇所で生貝が採集されているが，それ以外の産地からの棲息状況に関する記録はほとんど公表されていない。瀬戸内海でも目にする機会は少ない。

岡山県でも文献記録は存在しないが，畠田和一コレクションに「備中〔浅口市〕寄島 1956.1.23. 黒田〔徳米〕氏同定」とラベルされた合弁 1 個体 (#2971；展示標本) が現存する。この個体は左右の殻の中に乾燥した軟体部が残されており，採集時に生貝であったことは確実である。したがってその当時は県内に本種が棲息していたことは疑いようがないが，それ以降は破片すらも見出されておらず，もはや

県内から完全に消失してしまった可能性もある。現在の浅口市寄島町周辺の海は富栄養化して水は濁り，底質も還元化した泥からなる場所が大半を占め，本種が棲息可能な透明度の高い海水と清浄な細砂から成る海岸など，一体どこに存在していたのかと訝しくなるほどである。高度経済成長期における県内沿岸の環境破壊によって一掃されてしまったとしても不思議はない。



ホクロガイ

*Oxyperas bernardi* (Pilsbry, 1904)

(二枚貝綱：自鰓亜綱：異殻下綱：異歯区：真異歯亜区：新異歯大目：マルスダレガイ目：バカガイ上科：バカガイ科)

展示標本： #1958 備中〔浅口市寄島町〕安倉

太平洋側は茨城県沖以南，日本海側は男鹿半島以南に知られ，九州まで多くの記録があるが，国外は韓国，中国（福建省東山），台湾からのみ報告され，日本（北海道と南西諸島を除く）・朝鮮半島・中国沿岸に固有な種と考えられる。

内湾・外洋とも潮下帯～漸深海底（水深 5～100 m）の貝殻混じりの砂泥底に棲息する。浜辺に打ち上げられることは少ないが，浚渫砂や漁屑には頻繁に見られる。近年の瀬戸内海でも，広島県倉橋島で「底引」で得られる漁獲物中には「多い」とされ，香川県でも「浚渫砂から磨滅した死殻が少数得られた。備讃瀬戸沖からは生体が採集された」との報告がある。他の地方でも特段の減少傾向は認められておらず，レッドリストに掲載された例もない。

しかし岡山県だけはそれに該当せず，明らかに危機的である。本県では畠田和一コレクションに「〔倉敷市〕下津井沖」（合弁 2 個体，#1959），「備前〔倉敷市下津井〕六口島」（半片 2 個，#1961），「備中〔浅口市寄島町〕安倉」（合弁 1 個体，#1958；展示標本）の 3 ロットが現存する。そのうち下津井周辺産の合弁の標本はいずれも採集時は生貝であったと推測され，1950 年代以前には入手がさほど困難でなかったことが窺い知れる。ところが近年は全く見出されず，最近 20 年間では玉野市渋川海岸に打ち上げれた半片 1 個が得られたにすぎない，しかもその標本は殻皮も殻色も完全に失われている上，他県から人為的に搬入された浚渫砂に由来する可能性も否定できないため，現在の岡山県に本種が棲息することを十分に証拠立てるものではない。潮下帯に棲む多くの貝類の種が絶滅またはそれ同然に陥っている本県では，本種も同様の状況にあるとみる方が自然である。



スダレガイ

*Paphia euglypta* (Philippi, 1847)

(二枚貝綱：自鰓亜綱：異殻下綱：異歯区：真異歯亜区：新異歯大目：マルスダレガイ目：マルスダレガイ上科：マルスダレガイ科)

展示標本： #1864 [浅口市] 寄島

北海道北西部以南，九州までと朝鮮半島，中国浙江・福建・広東の各省と海南島及び南沙群島，ベトナムまで産出が知られている

最近 50 年間に刊行された本種に関する文献の大半が，一様に本種は「水深 10～40 m」の砂底に棲むとしている。しかし実際には少なくとも 75 m 前後までは棲息するらしい。外洋と内湾にまたがって見られ，瀬戸内海においても 1980 年代前半頃までは周防灘に面した山口県周南市徳山や宇部市などで，鮮魚店の店頭にもオオスダレとともに頻繁に生貝が並び，食用として売られていた。広島県芸南地方では近年も本種とオオスダレの生貝が底引きで得られているなど，他県では特段の減少傾向が指摘されたことはない。ただし香川県では 2009–2013 年の調査において「ほとんど見られない」とされ，「主に浚渫砂から採集された。潮下帯での生息状況は不明である」とも報告されている。

実のところ岡山県では香川県よりはるかに希少化しており，今世紀に入ってから極端に褪色・摩滅した半片死殻が笠岡港の漁屑から数個得られたのみで，現在の本県内に個体群が維持されていると判断できる状態にない。本種はもとも岡山県に少なかったわけではなく，それどころか畠田 (1935) は本種が「小田郡〔現・笠岡市〕北木島村飛島」で地元住民に「アカガヒ」という方言で呼ばれていたことを記録しており，当時は少なくとも笠岡諸島周辺では方言が定着する程度には人目につく普通種であったと考えられる。畠田和一コレクションにも「〔浅口市〕寄島」産(「1956.12.2」採集, 1 個体, #1694; 「昭和 35 [=1960].12.4.」採集, 3 個体, #2562; 採集日不詳, 1 個体, #1864; 展示標本), 「〔笠岡市〕白石島」産 (1 個体, #1865), 及び詳細産地無記入ながら県内産であることは明らかな 1 個体 (#4438) が現存し，それらすべてが殻表の光沢や靱帯も残された合弁であり，採集時は生貝であったことは疑いがない。

したがって 1960 年代頃までは瀬戸内海に面する他の県と同様，岡山県でも本種が普通に見られたのは明らかであるが，その後の埋め立て・干拓・護岸・海底浚渫・水質悪化などによって短期間で急減し，もはや県内の海域に残っているかどうかとも危ぶまれる状態である。特に砂を採取する目的でなされた過剰な海底浚渫が潮下帯の環境を激変させ，本種とオオスダレに致命的な打撃を与えた可能性がある。現在の岡山県において，本種と同じ *Paphia* スダレガイ属に属す種で生貝が確認されるのはアケガイ 1 種のみである。



オオスダレ

*Paphia schnelliana* (Dunker, 1865)

(二枚貝綱：自鰓亜綱：異殻下綱：異歯区：真異歯亜区：新異歯大目：マルスダレガイ目：マルスダレガイ上科：マルスダレガイ科)

展示標本： #1861 備中〔浅口市寄島町〕安倉

太平洋側の最北の記録は岩手県大槌湾，日本海側は山形県で，同県では「きわめて普通」という。南は九州までと朝鮮半島に分布する。中国南部以南でも文献記録はあるもののそれらは別種の可能性があり，本種が分布するか否かは不明瞭で，日本本土～朝鮮半島周辺固有種の可能性もある。

スダレガイとともに外洋と内湾を問わず潮下帯以深の砂底に棲息し，多くの文献は水深 100 m まで見られるとしている。瀬戸内海においてはスダレガイよりも少ないとされ，これは 1980 年代頃の山口県周防灘沿岸でも同様で，本種はスダレガイの中に時折混ざっているのを目にする程度であった。他県では特段の減少傾向が指摘されたことはない。ただし香川県では 2009–2013 年の調査において記録されておらず，スダレガイより減少傾向が激しい可能性がある。

岡山県ではそもそも過去の文献記録がなく，畠田和一コレクションに含まれる「備中〔浅口市寄島町〕安倉」産の合弁 1 個体 (#1861；展示標本) が唯一の産出の証拠である。この個体は殻表の光沢や靱帯がよく保存された完全品であり採集時は生貝であったと考えられるので，その時代には県内に棲息していたことが確実である。しかしそれ以降は死殻すらも全く見出されず，スダレガイと同様の人為的な要因によって，前種に先んじて完全に県内から絶滅したか，そうでなくとも容易に目に触れないほど甚だしく稀少化していることは疑いを容れる余地がない。



カノコアサリ

*Timoclea marica* (Linnaeus, 1758)

(二枚貝綱：自鰓亜綱：異殻下綱：異歯区：真異歯亜区：新異歯大目：マルスダレガイ目：マルスダレガイ上科：マルスダレガイ科)

展示標本： #1905 備中〔笠岡市〕白石島

太平洋側は房総半島以南，日本海側は山形県鼠ヶ関以南，九州までと南西諸島に分布する。国外は済州島，海南島，台湾，西沙群島，ベトナム，フィリピン，インドネシア以東のメラネシア，ニューカレドニアなどから知られる。インド洋西部には産しない。

南西諸島以南の亜熱帯・熱帯域では「モート〔珊瑚礁のリーフの内側〕の細砂～砂底，低潮線～2 m」に多産するとされ，九州以北では外洋に面しながらも波穏やかな海岸や，内湾湾口部または島嶼間で潮流の速い場所において，潮間帯下部から潮下帯（水深約 30 m まで）の細砂底に棲息する。瀬戸内海沿岸のいわゆる白砂青松の浜辺（花崗岩が破碎されて生じた砂からなる，比較的貧栄養で清浄な環境）を好み，往時は砂浜に多くの死殻が打ち上げられていた。

しかしそれはもはや昔の話で，高度経済成長期以降の環境悪化（水質・底質の汚染，護岸・埋め立て・干拓に伴う海岸線の変形と単調化，浚渫による海底環境の破壊など）によって激減し，近年は目にする機会がほぼなくなった。香川県での 2009～2011 年の調査においては，少数の死殻が「燧灘のみで採集され備讃瀬戸では採集されなかった」と報告された。

岡山県では文献記録はなく，畠田和一コレクション中に「備中〔笠岡市〕白石島」産（合弁 5 個体，#1905，展示標本；半片 98 個，#1906；合弁 12 個体，#4267）及び産地無記入ながら本県産と推定される半片 2 個（#4453）が含まれている。白石島の海岸は典型的な白砂の浜が広がり，いかにも本種が好みそうな景観であるが，畠田標本に含まれている本種の個体数の多さこそは，往時の当地でまさにごく普通に見られたことを証拠立てている。特に合弁個体は色彩も鮮やかなままで，採集時は生貝または死亡後まもない状態であったことは確実である。

しかし今世紀に入ってから 20 年間で，県内での本種の棲息を明示する情報は一切ない。唯一，2010 年に笠岡市北木島大浦の港に積み上げられた浚渫砂の中に複数の半片死殻が混ざっていたが，この時の殻は著しく褪色した古いものであった。現時点で県内に個体群が存続している可能性は限りなく低く，控えめに見積もって絶滅寸前である。

